全　体　会（小学校）　発　表　資　料

新潟県柏崎市立中通小学校

1　柏崎市の「推進地域」としての取組

(1)　柏崎市の概要

柏崎市は新潟県のほぼ中央部に位置する人口約 8 万 7 千人の都市である。日本海に面し景勝地も多く、夏には多くの海水浴客が訪れる。市内中心部を流れる鵜川と鯖石川は肥沃な土地を形成し米作りが盛んである。しかし近年は都市化や少子化の波が押し寄せてきており、子供が自然体験や農業体験をしたりお年寄りや地域の方々と接したりする機会が減少してきている。

(2)　本事業への取組の概要

柏崎市では、小学校 5 校、中学校２校、高等学校 1 校の計８校が推進校としての取組を行っている。地域の現状を踏まえ、教育課程に体験活動を積極的に位置づけ、市のめざす「心豊かで、自ら学び続け、柏崎を愛する子ども」を育てたいと考えている。

市教育委員会、推進校、専門機関（大学、企業）の代表者からなる豊かな体験活動推進地域協議会で、次の活動を重視して協議や情報交換を行っている。

① 自然や勤労生産に関わる体験活動
② 交流や福祉・町づくりに関わる体験活動
③ 職業・就業に関わる体験活動

「推進地域」として小学校では主に以下の取組を計画している。

① 総合的な学習の時間における学年間の系統性を踏まえた全体計画の作成と実践を行う。他の教科や領域においても、体験活動を計画的に位置づける。
② 自然に親しみ探索する活動の推進。（花いっぱい、川探検、森林探索等）
勤労生産や食糧生産に関わる活動の推進（花や稲や野菜の栽培、豚の飼育等）
お年寄りや福祉施設との交流の推進（地域のお年寄りとの交流、施設訪問等）

2　中通小学校における取組

(1)　児童の実態

本校は児童数 100 人、学級数 6 の小規模校である。柏崎市街から北東に約 10km 離れた農村地域にある。3 世代同居の家族が比較的多く残っている。児童は地域の中でのびのびと育ってきている。素朴・率直で、何事にも一生懸命取り組む姿が随所に見られる。

保護者を対象とした 4 月実施のアンケート調査では、中通小学校児童の特徴として、「学校に行くことが楽しいと感じている」(76%)、「優しさや思いやりがある」(74%)、「誰とでも仲良く生活できる」（59%）等がよさとして挙げられた。しかし、反面、進んで活動したり、創造性を発揮して新しいことに挑戦しようとしたりする面の弱さが指摘された。また、少人数集団であることから人間関係が固定化し、周囲の動きに合わせて行動しようとする等、自主性や新しい場面での対人適応が心配された。アンケートでも「物事を計画的にできる」（9%）等の項目で評価が低かった。これは本校の教職員を対象としたアンケートでも同様な結果が得られた。

（2）取組の方針

児童の実態を受け、当校は、「自主性・創造性の育成」を本年度の重点目標として設定した。そのために、児童が取り組む課題は、教師をはじめとする他者からの与えられた課題ではなく、児童一人一人の思いや願いに支えられたものであることを大切にしてきた。児童の思いや願いは、感性を生かした豊かな体験活動の中から生まれると考え、有効な体験的活動を組織することにより、その子なりの問題意識の醸成を図るようにした。

児童が取り組む課題を、一人一人の思いや願いに支えられたものにするため、いずれの活動についても計画に柔軟性を持たせ、児童自身の選択や工夫を採り入れ易くした。また、少人数であることに起因する人間関係の固定化や対人経験の不足を克服する意図から、いずれの活動についても保護者や地域住民と接したり、他者へ働きかけたりする活動を可能な限り取り入れるように努めた。

新指導要領実施初年度である本年度は、特に「総合的な学習」と関連付けた取組を積極的に進めた。

(3) 主な活動内容と実践経過

① 主な活動内容

ア 全校児童による「花いっぱい」活動（特別活動）。

(ｱ) 各学級による花壇の整備

(ｲ) 一人一鉢の花作り（年 2 ｻｲｸﾙ）

(ｳ) 自然いっぱい委員会（児童会）による児童玄関、前庭周辺のプランター栽培

(ｴ) 花による卒業式・入学式会場装飾 (「一人一鉢」と委員会のプランター)

イ 2 年生による野菜作り、ヤギの飼育(生活科)

(ｱ) 学校園での夏野菜と秋野菜の栽培体験

(ｲ) 収穫した野菜試食と指導者、協力者の方への感謝の会

(ｳ) ヤギの飼育

ウ 3 年生による花作り(総合的な学習の時間)

(ｱ) 種まきからの花作り（花苗、プランター、花壇、ヒマワリ畑）

(ｲ) 各学級への花苗プレゼント活動 (「一人一鉢」、学級花壇用)

(ｳ) 地域への花苗プレゼント活動

(ｴ) 育てた花を使っての染物、ドライフラワー制作

エ 5 年生による米作り(総合的な学習の時間)

(ｱ) 借用田での手作業による田植え、稲刈り体験、水管理、草取り等

(ｲ) ミニ水田での「古代米」栽培

(ｳ) 稲の生長観察・記録

(ｴ) 収穫米試食と指導者、協力者の方への感謝の会

(ｵ) 世界の稲作文化や食と食糧問題を調査

② 実践の経過

ア 全校児童による「花いっぱい」活動（特別活動）

4 月の学級花壇には、前年に一つ上の学年が植えたチューリップ、クロッカス、ムスカリ、スイセン、アブラナ等の花が咲いている。

5 月にこれらの球根、種子を収穫し、夏～秋用にマリーゴールド、サルビア（赤、青）、ペチュニア、ロベリア、メランポジューム等の苗を植えた。植える花の種類や配置は各学級に任される。「一人一鉢」の苗の植え込みもこの時期に行うが、花の種類も各自が決める。苗は 3 年生が総合的な学習の時間に種子から育て、全校にプレゼントしたものである。

11 月初旬には、花壇にチューリップ等の球根を植えた。また、「一人一鉢」にはサクラソウやパンジーの苗が植えられた。これも、3 年生が育てたものである。

この他、自然いっぱい委員会（児童会）による栽培活動が行われた。子供たちはそれぞれ根気強く世話活動を行った。昨年まで卒業式、入学式の会場を育てた花で飾ってきた。今年もそれを目標に世話活動を行っている。

イ　2 年生による野菜栽培、ヤギの飼育(生活科)

2 年生は生活科学習として学校園で、夏、秋の 2 回野菜を栽培した。育てる野菜を各自が決め、育て方を調べ、路線バスを利用して校区外の店で苗を購入した。育て方や畑の作り方等、わからない点を保護者や祖父母に教えていただいた。収穫後、育てた野菜を使ってのサラダパーティーを開き協力いただいた方々をご招待した。キュウリ、キャベツ、トマト、トウモロコシ、ナスその他が栽培された。

また、2 年生は生活科学習として、オス、メス 2 匹のヤギを飼育した。春に柏崎総合高校からお借りしたヤギだが、3 匹の子ヤギが誕生し、児童のみならず家庭、地域の話題を集めた。夏休み中も保護者の協力を得て充実した世話活動ができた。

ウ　3 年生による花作り(総合的な学習の時間)

「自分たちの育てた花の苗をプレゼントして、中通を花いっぱいにしよう」という願いから、前年度の 3 月に種まきをして世話活動を続け、ポットに苗作りをして本年度に地域や全校に苗をプレゼントした。

苗作りに当たっては、根気強い世話活動を展開し、世話活動の仕方が向上した。夏休み中も世話活動を継続した。栽培した花のうちロベリア、ペチュニア、サクラソウ等は子供たちにとって、苗作りが適度に難しかったことや、苗を購入するのでなく種まきから行ったことが活動の継続性を高めたと考えられる。

花苗のプレゼントをはじめ、様々な活動の中で地域の方々と多く接することができた。また、苗とともに届けるカード（花の特徴や育て方を記述）の制作等、相手意識を持った活動をすることができた。地域の方々からの温かい言葉がけにより、次の活動への意欲や他者への接し方を高めた子も多くみられた。また、自分たちが育てた花を材料にしての、染物やドライフラワー作りなどは初めての体験であり、その面白さを親子で楽しむことができた。

エ　5 年生による米作り(総合的な学習の時間)

休耕田約 2,5 アールを借用し、手作業による田植え体験、水の管理、草取り等の世話活動をし、秋には９０kg の米を収穫できた。充実した活動のために、田打ち、しろかき、その他の事前準備や作業方法の指導に、家庭、地域の方の力が大きかった。収穫米試食会を兼ねての指導者、協力者の方への感謝の会をもった。5 月から 9 月までの栽培期間の長い活動であるが、途中、水の管理の失敗や悪天

候や雑草の伸び過ぎといった問題が起こった。それらへの対処もまた学習におけるよい問題解決の場となった。稲作が大変な労力を要する作業であることをどの子も実感できた。

③　体験活動推進のための体制

どの活動においても、家庭や地域の方の協力を得ている。担任の計画に基づいて保護者、祖父母等が支援の中心となり、ＰＴＡの学年委員や担任外の職員が援助している。

一例として、花作りに使用する土は他で使用した土をふるいにかけ肥料等を配合して再利用しているが、大量の土をふるいにかける作業は児童だけでは難しいため、ＰＴＡ作業日に保護者にも手伝っていただいた。

また、学級におけるＰＴＡ活動も、本年度より体験活動充実に向けて学級担任との連絡をより密にしながら活動内容を検討していただけるようになった。

全校による「花いっぱい」活動に、3 年生が花の苗を育て提供することを申し出てくれたが、花の種類も、苗の数も大変多くの数を必要とする。そこで親子ＰＴＡ作業として、一番人手を要するプラグトレイから苗ポットへの移し替え作業を手伝っていただいた。また、育てた花を使っての染物やドライフラワー作りの活動も親子での活動として実施したことにより子供たちの充実感や喜びはいっそう大きくなったといえる。

④　成果と課題

ア　成　果

(ｱ)　栽培活動や飼育活動の様々な場面で地域の方と接し、多様な対人経験をすることができた。「どのようにお願いすればいいだろうか」「どうすれば気持ちが伝わるだろうか」等、子供たちが人との接し方を考え、実践していく場となった。また、地域の方々からの温かい言葉がけ等により、満足感や次の活動への積極性を高めた子も多く見られた。

(ｲ)　栽培活動や飼育活動は長い期間、根気を要する活動であるが、それだけに、対象への愛着がわく。観察し記録する活動の中では、小さな変化を目ざとくとらえ、仲間や担任に喜んで伝えたり、丁寧に記録用紙に書き込んだりする姿が多く見られた。

イ　課　題

栽培活動は長期にわたる活動であり、意欲の低下を招きやすい。他の活動と栽培活動を組み合わせたり、他者と関わる場面を取り入れるなど、活動に変化を持たせて意欲の継続を図る工夫が必要である。

⑤　次年度の取組に向けて

1 年間の栽培や飼育活動の体験は重要な意義を持つ。しかしその体験がどこでどのように生きていくか（生かしていけるか）についての、検討が不足しているのが現状である。例えば、花を作る活動から「土」に目を向けて追求したり、米作りで生じた大量の稲わらの処理方法に目を向けて追求したりすることで、環境学習へ発展することなども検討の余地がある。他にも様々に発展していくことが可能であると考えられる。こうした一つの体験の発展の可能性を検討し、更に深めていきたい。